

### III. 総合人間科第3年次高校の実践報告

高1 石川久美・川齊・合藤・勇真	三小田・米矢・子り・孝巳・治・田口・木島・三滝・三雄・弘巳・湯・澤・木山・丸	博閨・田中・木口・島・島・島・島・島・島	昭一修・子徹
高2 仲田恵子・山氣・駕田・輝裕	川徳・田井・長谷・佐川・藤口	田・木・川・井・谷・川・佐・川	惠・喜世・基
高3 横本直子・山徳・田中・長谷・佐川	木・口・藤・口	木・口・藤・口	秀克
			文彦豊

#### 1. 高校1年生

#### 生命と環境 —考え方！私たちのネットワーク—

石川久美・川齊・合藤・藤真	米田一昭・川氣・鶴真	三小田博・昭修・子治
矢木	木	木

##### I. 学年テーマについて

「生命と環境」については、テレビなどのメディアを通して、ある程度知っているが、事実を十分に把握していなかったり、自分なりの考えをもたない場合も多い。「生命と環境」は社会の根幹に関わる問題でありながら、既成の教科ではなかなか継続的に扱うことが難しいのが現状である。

この総合人間科の目的は、一年を通して自分の個人テーマを追求する過程で、メディアからの間接的な情報だけでなく、教室から出て、自分で見聞きする機会をもち、友人と話し合いする中で、学校を人とのつながりの場とし、これを拠点として社会の中での自己を問い合わせし、幅広いネットワークを形成していくことである。

この中で「自ら学ぼうとする意欲」や「自分で考え行動する力」を育て、さらに、パネルディスカッションなどの討論方法を身につけることにより、この1年間を「人生を自覚的に選択していく力」を育てる基盤としていくことを目標としている。

##### II. 学習方法と指導体制について

一学期の初めの、オリエンテーションや林間学校

では、学年やクラス単位で行ったが、6月からは個人テーマの内容別に6つのグループに分けて担当教員を決めた。

自分の個人テーマと内容の近い20人のグループの方が、例えば、フィールドワークの報告会にしても、クラス単位よりも関心があり、時間も半分で済み、担当教員も全体を把握しやすい。このため、3月のお互いの個人論文や集録を読む時間以外はほとんどこの小グループでの活動であった。

#### III. 第2年次から第3年次にむけて

##### 1. 前年度の同学年との比較

昨年度と同様に、11月にフィールドワークを行い、1年間個人テーマを追求する。昨年度、生徒の中には何をテーマにしてよいのか夏休みまでに選べない生徒がいた。このため、オリエンテーション期間を充実させ、身の回りの「生命と環境」を写真に撮る機会と林間学校においてのクラス別フィールドワークと分科会の企画を付け加えた。

また、11月にフィールドワークでは、見学や話を聞くことが中心であるため、夏休みなどを利用した看護体験などの参加型のフィールドワークを学校でも紹介し、9月には夏休みの活動報告会を行った。

## 2. 前年度からの継続と発展

附属中学出身の生徒は、中学2年生での「水と食物—生命の源—」に関する個人研究において個人研究の追求方法、フィールドワーク先の見付け方、多様な表現方法による発表、個人論文作成を経験している。中学3年生では「体験を通して考える国際理解」のテーマのもとで、広島でのグループ別学習やグループごとの多様な発表を行ってきている。

しかし、いずれの学年においても、まだ、発表と質問という形にとどまっていることが多かった。今年度はさらに、ディベートやパネルディスカッションなどを取り入れて、自分の意見をもち、発表し、討論する力をのばしていくことを目指した。

## IV. 指導の経過

(4月19日)オリエンテーション

昨年度の内容紹介。今年度の内容紹介  
班ごとに、「生命・環境」に関する写真を撮る。

保護者参観

(5月15日)クラス討論会準備

(5月28日~30日)

林間学校にてクラス別フィールドワーク、  
分科会、クラス討論会、教員からのガイダンス

(5月31日)林間学校事後指導

班ごとに撮った写真を発表したのち、B  
紙に貼って教室掲示。

(6月7日)個人テーマを6つに分類し、グループごとに発表し、アドバイスしあう。

(6月21日)個人テーマの追求方法および、夏休みの  
フィールドワーク計画書の作成1回目

(7月5日)教育学部新海英行先生・額田町森林組合  
の木見尻哲史先生の話

(7月10日)個人テーマの追求方法および、夏休みの  
フィールドワーク計画書の作成2回目

(9月6日)グループ別夏休みの活動報告会

(9月20日)11月6日のフィールドワークの訪問先決め

(10月4日)電話や手紙で内諾をもらう

担当教員、個別に訪問先確認

図書館または、分科会会場で下調べ

11月21日のパネルディスカッションのテーマ、パネリスト、司会者決め、資料の準備

(11月1日)6グループがそれぞれ決めた討論テーマ  
のパネルディスカッションを主催

(11月6日)高1フィールドワーク

(11月15日)3限目は、分科会別のフィールドワーク  
報告会

4限目は、フィールドワークの内容を受けて、パネルディスカッションの手直し

(11月21日)研究発表会にてパネルディスカッション  
第1、第3、第6グループが主催

(11月29日)個人研究論文作成1

(12月6日)個人研究論文作成2

(1月29日)個人研究論文作成3

(1月31日)個人研究論文作成4

(2月7日)研究集録原稿作成1

(2月21日)研究集録原稿作成2

(2月26日)小論文 例：総合人間科を通して考えたこと

(3月12日)個人論文を交換して読む、意見交換

(3月19日)研究集録を読む。意見交換。

## V. 生徒の取り組みの様子と変容

### (1) 林間学校

林間学校に意識的に総合人間科を関連づける試みの3年目として、新たに2つの企画を加えて、研究企画を4つとした。

研究企画I：クラス別フィールドワーク

研究企画II：分科会

研究企画III：クラス討論会（ディベート）

研究企画IV：教員ガイダンス

クラス別フィールドワークでは、林間学校の宿泊地である茶臼山までクラス別に乗るバスを利用してクラスごとに決めた見学地を訪れた。

フィールドワーク先	討論会テーマ
A組：矢作ダム	長良川河口堰の是非
B組：海上の森	愛知万博の是非
C組：勘八不燃物処理センター	自動販売機の是非

また、今年度初めての試みとして、研究企画IIとして分科会を設けた。例年、せっかく茶臼山まで行っても現地で暮らす人たちと話す機会は少ない。そこで、現地のシルバー人材の方と天文台の職員の方にお願いして、「花祭り」「炭焼き」「木の名前とその利用法」「ストーリーテリング」「星の話」「バードウォッチング」など9グループに分かれた。

1グループ14人程度と人数も少なく、実際に葉っぱをかじらせてもらったり、休暇村前で星を観察したり、花まつりのお面を見ることができた。ストーリーテリングでは、部屋を暗くしてろうそくを1本

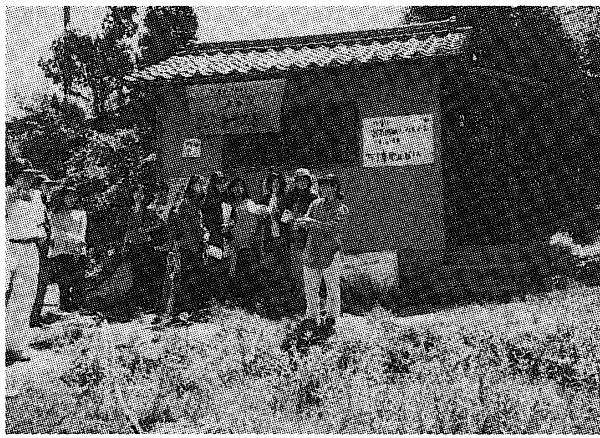
立てて話を聞いたところで、生徒は「いい雰囲気だった」と引き込まれた様子であった。



時期的に、愛知万博が海上の森に決定するかどうかという時であったので、B組では、研究係から、“賛成派の人と反対派の人の両方から話を聞きたい”という意見がでた。林間当日に海上の森を歩きながら、それぞれの立場の人に話を頼むという案も出たが、調整がつかなかった。そこで、事前に学校で愛知県庁万博誘致対策局の方に来てもらって、万博の目的、内容方針を説明していただいた。

そして、当日は、ものみ山自然観察会の方に説明をしていただいた。人工林と天然林の見分け方などを習った。天然林では、いろいろな種類の木があり、いろいろな種類の生きものが住めるが、人工林では、樹齢の揃った杉がずらりと並んでいる。愛知万博のパンフレットにある一自然との共生一の“自然”とは何かを問い合わせし、次のような感想を書いた生徒もいた。

「思っていたよりずっと自然が豊かな現場で驚いた。歩いたところのほとんどが壊されてしまうと聞いて、とても悲しい気持ちになった。県側は、もっと森を良くしてあげましょうと言っているが、人工林を残す計画ばかりで、地元住民などとの“自然に対する意識のズレ”を感じた。」



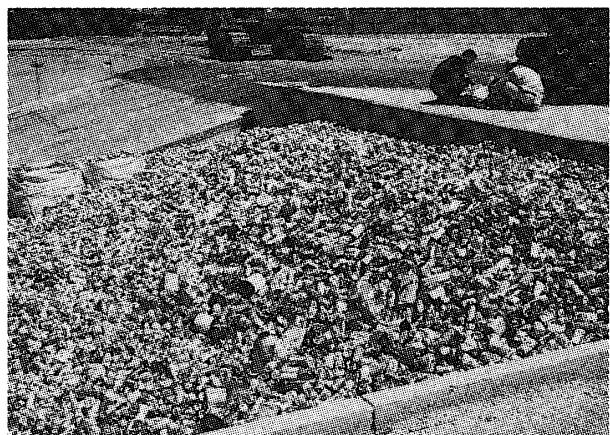
新聞やテレビで愛知万博という言葉は聞いていても、どのような内容なのか、海上の森がどこにあるのかわからない状態であったが、見学をしたことにより、「美しい森を見たら万博反対になった」というように意見の変わった生徒もいた。

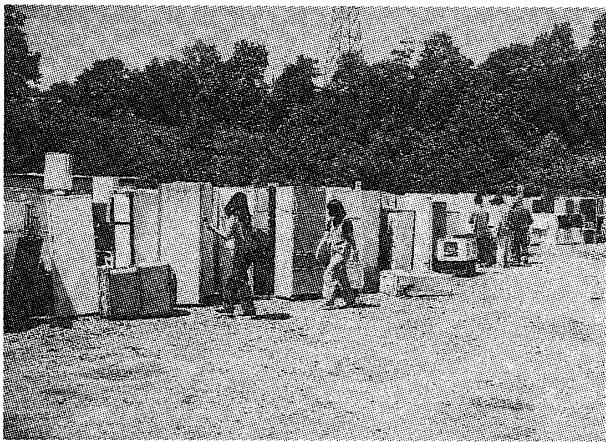
クラス討論会は、ディベート形式を導入したが、特に万博賛成派は、もともと小人数であり、自分の意見と異なる意見を言うことに慣れていないこともあり、論理的な展開が十分できなかった。また、「言いたいことが言えなかった」という不満や、「負けたのが納得できない」など、勝ち敗けへのこだわりも見られた。しかし、「(時おり説明がわからなかったけど) 2つの立場から物事を見るのは、大切な事だと思った」という感想にもあるように、“自分の意見と違う立場で考えてみる”という経験にはなったようである。

C組のフィールドワーク先である勘八不燃物処理センターを見学した研究係の生徒は次のように書いている。

「最初に私たちが来た時は、ゴミ処理場の大きさに少々驚いてしまいました。しかも説明では、あと2年もたないということでしたので、このことが信用できませんでした。しかし、1台のゴミ收拾車が来て、すごい量のゴミを捨てていった時には、すごいなあと思っていた矢先、同じ様なゴミ收拾車が1台、また1台と来た時には言葉を出すことができませんでした。そして私が思ったことは、2年ももてばいい方か、と思ったほどでした。」

この他にも、立ち並ぶ冷蔵庫の中を歩き回って、6つの市町村だけで、これだけ出ることを実感した生徒もいて、パンフレットだけでは感じることのできない経験をすることができた。そして、クラス討論会での自動販売機からくるゴミ問題にもつながつていったことと思われる。





### (2) 教育学部新海英行先生・額田町森林組合の木見尻哲史先生の話

この時点で、個人テーマをまだ決めていない生徒にとって参考になるようにと「生命と環境」に直接結びつく“森林”的話をしていただいた。

教育学部へ移動し、実物投影機、スライド、自動で閉まるカーテンなどの設備が整った教室で写真を見ながら説明を聞いた。

次の感想を書いた生徒は、林間学校で、海上の森を歩いたことと、この話を聞いたことがきっかけとなって個人テーマを「森の減少」に決めた。

「外国から木材を輸入すると日本の森もあれ、現地の人も迷惑だと知って驚き、日本で木を育てていかなければならぬと思った。木が伐採できるまでに60～70年もかかるので次の世代へどんどん受け継いでいかないと日本の森はどんどん荒れていってしまうだろう。そして森が荒れているのは日本だけでなく世界の問題でもあり、森だけでなく他の（カモシカなどの）ことにも関連していてとても難しくたいへんだなあと思った。しかし、森が荒れると私たち自身の生活も危なくなるので自分のことだと考えなければならない。」

教育学部の附属でありながら、どこに教育学部があるのか知らない生徒もいたが、一度訪れたために、次回のフィールドワークの時には、行きやすかったようである。

### (3) 夏休みのフィールドワーク

夏休み直前の総合人間科2回を使って、夏休みの活動計画を立てた。一日看護体験や高校生ボランティアなど、夏休みしかできない参加型のフィールドワークを行なうことをアドバイスした。しかし、テーマによってはなかなか行き先が難しかったり、まだ、自分から進んででかける程意欲のない生徒も多

かった。それでも、約3分の1の生徒は何らかの形でフィールドワークを行なうことができた。

一日看護体験でガンセンターへ行ったKさんは、その後の「癌について」という個人テーマの追求につながっていった。

「驚いたことが2つありました。1つは患者さんひとりひとりが自分の病気、つまり癌であることをちゃんと知っていて、どこがどんなふうに悪いからどんな治療をするといった細かいことまで病院側から聞かされていて、すべてを知っていたこと。2つめは、そのわりにはといってはなんだけど、私の思っていた患者さんのイメージとは全く違ってみなさんがとても明るかったことです。‥（中略）‥患者さんたちの目には前向きな姿勢が感じられて癌と正面からぶつかって、ちゃんとむき合って闘っている人たちばかりでした。」という文にもあるように、病気と闘う姿が印象に残ったようで、11月のフィールドワークには、ホスピス型のシステムをもつ愛知国際病院を選んだ。癌とは何かという疑問から始まって、癌の告知へとテーマが広がっていった。

### (4) 11月6日のフィールドワーク

1年生全員が、自宅から直接フィールドワークを訪れる方式で行った。午前1箇所、午後1箇所で合計2箇所を訪れて、人から話を聞く機会をもつことを基本とした。このため、120人が訪れたフィールドワーク先は120箇所を越えた。

120人のうち80人は、附属中学からの進学者で、そのうち70人は2年生の時に、同じく総合人間科で夏休みにフィールドワーク先を自分で捜した経験があったため、電話での申し込みに慣れている生徒が多くかった。

しかし、一方で附属中学以外からの進学者40人に對しては、十分なガイダンスをする機会がなかったためどうやって探し、交渉すればよいのか困っている者もいた。附属中学出身の者は中学3年生の修学旅行のフィールドワーク先も自分たちで決めた経験をもつので、自分で決めなければだれも決めてくれないことを感覚的に理解していた。この80人中の70人余りが残り40人にフィールドワーク先探しの方法を伝えていくであろうと予想して、あまりガイダンスに時間をとらなかったのである。しかし、80人が残り40人を引っ張るより、40人の中の20人あまりがブレーキになり、逆に全体の意欲が低下した。

120人をテーマから考えて6つに分けて、担当教員を決めたのであるが、特に、内容が多様で、分類ができず“その他”にあてはまるグループとなつた第

4 グループでは、その傾向が強かった。フィールドワーク先を決める努力をしないために、担当教員が交渉を手伝い、時間と場所を設定したにもかかわらず、当日欠席した生徒が3名いた。

第3グループは、科学に関するテーマを集めためフィールド先を考えやすく、23名と最も多い人数を引き受けたにもかかわらず、意欲的な生徒が多く追求活動はスムーズに進んだ。ただし、病院で話を聞きたい生徒たちは、先方が多忙のためなかなか受け入れてもらえない、タウンページを見ながら5件以上交渉して、やっと受け入れてもらえるといった状況であった。

個人論文には、フィールドワークで聞いた内容がかなり多く書かれている。最後に書いた小論文を見ても、「フィールドワークへ行ってから総合人間科に対する思いが少し変化しました。もっとまじめにやろうって。ちゃんとした先生たちに時間をとってもらって考えていただいたのに私がこんなふうではダメだと思いました。」というように、フィールドワークをきっかけに取り組みが変化した生徒が多い。

「夏休みに“二見シーパラダイス”へ行った。しかし、まったくというほど何も調べてこなかった。たくさんの種類のペンギンたちがいたことと、おみやげに赤福を買ったことは覚えているが、どんな種類のペンギンだったか覚えていない」というように、常設の会場に行って見るだけでは印象が薄い。同じ生徒が、フィールドワークで名古屋港水族館に行き、“人”に直接話を聞き、「それから真剣に取り組むようになった」と書いている。

他にも「自分でアポをとるのは一人前になったようでいい気分だった。（中略）成長してから大人にあまりいい印象はもたないようになった。しかし、一年間やってきてやっぱりすごいなと考え直した。自分のことを自分でやるのはとても大変だとわかった」（Y. Mさん）などのように、テーマの追求に直線関係なくとも、自分が訪問先を見つけて自分で交渉したからこそ“大人”への概念に変化をもたらした生徒もいた。

しかし、Y. Mさんと同じ病院に時間差的に生徒が個人交渉したために、まとめて学校が申し込むようにという苦情が寄せられた。生徒が内諾をとってからは、学校からの正式の依頼状を出していたのであるが、この文書が先に欲しいということである。今後、多くの学校で総合科目が導入され、大勢の生徒が交渉する中で、はじめは好意的に受け入れても

らっていた先方が、次第に受け入れに制限をしていく傾向も考えられる。

#### {フィールドワーク先の例}

##### [名古屋大学内]

教育学部、保健体育センター、医学部、工学部、農学部、情報文化学部、大気水圈科学研究所

##### [名古屋大学以外]

老人ホーム、市役所、気象台、保健所、名古屋市立大学病院、中部電力、県庁、国際センター、リサイクルセンター、インターナショナルスクール、黄柳野高校、国際協力事業団、家庭裁判所、日本赤十字病院、愛知国際病院、農業試験場、愛知教育大学、南知多ビーチランド、児童相談所など

#### (5) パネルディスカッション

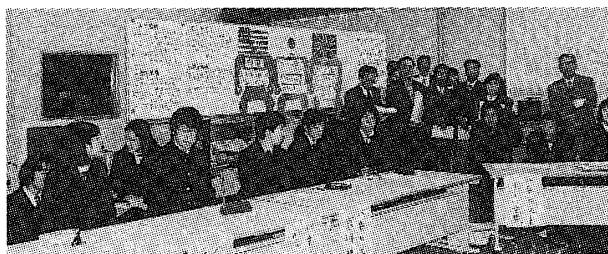
個人テーマを追求することは、自分の興味・関心から始まっているだけに、追求の基盤がしっかりとしているという反面、他の人の個人テーマに関心をもたないという面もある。

「考えよう！私たちのネットワークーというサブテーマにもあるように、学校とフィールドワーク先とともに自分たちどうしのネットワークづくりを考えて、討論の機会を設けた。

林間学校では、ディベート方式を取り入れたが、自分の意見が言えない、聞いている者が発言できないという不満も多かった。また、「勝ち負けを決めるのは良くない。討論というのは、自分の意見を言ったり、言い返されたりした、自分の意見を深く考えるためにあると思う。それなのに勝った、負けたを決めると、自分の意見が正しくなかったのかと思っていた気がとてもした。」という意見もあったため、今回はパネルディスカッション方式とした。

個人テーマは100種類以上あり、すべては討論できないために、6つのグループで、それぞれ関連のあるテーマを決めた。

「現代の心の悩み」「人工授精と体外受精の現状と問題点」「ライフスタイルの選択」「安楽死」などの6つのテーマをそれぞれ選び、1つのグループが主催して1つのグループがフロアーになった。11月21日の公開授業では、この中の「現代の心の悩み」「人工授精と体外受精の現状と問題点」「ライフスタイルの選択」について討論した。



「現代の心の悩み」のグループではパネリストが、それぞれ、「心と命」「思春期の不適応」「不眠症とストレス」「異常殺人者の環境」「笑いについて」というテーマで発表を行った。

「ライフスタイルの選択」のグループは、森林班、ゴミ班、地球温暖化班の3つに分かれて発表した。

この2つのグループは、6グループの中で最も個人テーマどうしの関連が深く、各自の個人研究を発表しあうことにより、自分のテーマに還元する部分が大きかった。

しかし、「人工授精と体外受精」のグループでは、直接自分の個人テーマとの関連が少ないパネリストもいて、発表準備と自分の個人研究が平行することになり負担が大きかった。

いずれのグループも、パネリストの意見が対立する訳ではないため、ディベートでは扱えないテーマであり、討論の形式としてパネルディスカッションは適当であった。

ここでは、「人工授精と体外受精の現状と問題点」のグループの取り組みを詳しく紹介する。

「人工授精と体外受精の現状と問題点」の司会者のSさんは、討論の初めに、このパネルディスカッションという機会を自分たちがどう生かしていくのかを、次のような言葉で他の生徒に伝えた。

「パネルディスカッションの中で、パネリストからの問題点に対し、自由討論を行い、自分の意見を深め、「生命と環境」というテーマを考える糸口にしましょう。個人研究を行う中で、そこで得たことをもとに討論会を行うと、より一層考えが深まります。テレビや新聞である程度見聞きしていても、十分に事実を調べ、友達と討論する機会はありません。総合人間科の目的もある、自ら学び、考え、自己の中で答えを見つけ、学ぶことの楽しさを見つけられればと思います。一人一人の研究テーマの内容は様々ですが、この機会に私たちがこれまでに学んできたことを互いに伝え合い、意見交換をして友達との相互理解を深めたいと思います。私たちを取りまく、様々な問題の知識を深め、問題を解決してゆくために、今後、私たちが、生きてゆく上で、どのような行動をすべきか、どうしたらいいのかを考えたいと思います。本日のパネルディスカッション

で、私たち一人一人が、その点について、少しでも何かを得られればよいと思います。個人研究により、知識を得るだけでなく、自分なりの考えをもち、それを、発言できるようにしていきましょう。」

5人のパネルディスカッションは以下の内容について発言した。

#### ①減数手術について

成功率を高めるために複数の受精卵を子宮に戻すことから多胎妊娠が多い。もし全員出産すれば親も子も危険な場合が多いことから胎児の数を減らす手術は必要だと思うが選ぶ権利はあるのか。戻す受精卵の数を規制すべきである。

#### ②精子バンク

アメリカで精子が商品として売買されている精子バンクの現状の紹介。法律や条件をつけ、精子バンクは国営にすべきだ。

#### ③代理母問題

ベビーM事件を取り上げながら複数の母ができる問題点。卵子・精子の他人への提供、借り腹は禁止すべきだ。

#### ④子どもの親を知る権利

精子バンクを利用して生まれた子どもは父親を知ることができない。中絶胎児の卵子から生まれた子どもの親はこの世に存在しなったことになる。精子と卵子の提供は親の兄弟姉妹に限るべきだ。

#### ⑤各国の法律について

法律がなかったら、結婚しないで子どもだけ欲しいという女性が増加する。規制や法律は国単位ではなく、世界単位にすべきだ。

このグループでは、パネリスト、司会者、記録者という役割分担がすぐに決まった。しかし、23人中で、13人の役割がなかったので、この13人を5つに分けて、5人のパネリストの応援団とした。このため、パネリストだけが、原稿を考えたり、発表資料を作るということではなく、全員が何らかの形で参加することができた。

例えば、パネリストTさんは、実物投影機を使って紙芝居のように絵を入れ替えながら意見を発表したがその作成をすべて応援団の2人が行なった。多胎妊娠した場合の減数手術の問題点についてであったが、投影機の妊婦の絵に実物の注射器をもってきて針をさすなど凝っていた。

パネリストのK君はビデオを資料として使ったが、そのセットや場面選びは応援団が行った。さらに、原稿の資料となるデータも応援団のメンバーがインターネットで引き出して集めた。Mさんのペーパーサ

ート作り、M君とKさんの発表資料も応援団が作った。それぞれが、工夫してくれたので、難しい内容であってもフロアの生徒も楽しく参加できた。

この学年は、附属中学から進学した生徒は、総合人間科が始まった中学2年生の時にも個人テーマの追求活動を行い、全員が発表を行なっている。特に多様な表現を工夫するようにアドバイスをしたため、紙芝居、ペーパーサート、寸劇、実物投影機、人形劇など実際に様々な表現の工夫をした経験がある者が多かったことも助けになった。

生徒がこの討論テーマを選んだのは、本校には、高校1年生で全員必修の生物IAがあり、この授業中に資料を読んだり、ビデオを見たことが大きく影響している。また、この授業がなければ、フロアの生徒が一度聞いただけで、人工授精と体外受精の区別をすぐに理解することは難しかったと思われる。

また、参観者の中にイタリアの方がいて、「イタリアでは人工授精や体外受精に対しての規制が何もなくて自由だと言っていたが、カトリックの国なのでそうでもない。」というように意見が出るなど、フロアばかりではなく、参観者という国籍や年代の違う人の意見をも聞くことのできる機会となった。

「人工授精と体外受精」のパネルディスカッションを参観した教育学部心理学科3年生の感想には、次のように書かれていた。

「普段気心の知れた友人どうしなどの間でも、最近の高校生はあまり自分の性について話題にすることが少なくなってきたという印象をもっていた私にとって、この発表会は、意外なことであり、生徒の積極的な姿勢、まじめに性の問題に取り組む姿勢に関心させらっぱなしであった。性は恥ずかしいものであるという既成の考え方を思い切って剥ぎとり、どのように積極的に、まじめに取り組み、発表会に至るまでには、クラスの仲間との活動の過程で様々な困難な問題もあったであろうと想像される。当日の発表は、そういう困難を見事に払拭し、すがすがしささえ感じさせられるものであった。発表者やクラスの者たちだけではなく、見学者の我々にも意見を求め、その意見に対してさらに意見する生徒たちもいた。ひとつのテーマをみんなで考え、ひとりひとりが自分の意見をもつことの大切さを感じさせる発表会であった。」

担当教員としては、この感想を読んで初めて、パネリストの生徒たちが、恥ずかしさを感じる可能性

もあったことに気付いた。確かに、パネリストのTさんが個人テーマを発表した時に、「中絶」だったために、聞いていた生徒の中に“すごいのやるなあ”といった感じの反応はあった。しかし、グループ内で準備している時には、恥ずかしがる様子はまったくなかった。男女とも、一生懸命に子宫や顔つきの精子の絵などを楽しそうに書いていた。上記の感想とは逆に、以前より、このような内容を討論のテーマとして扱いやすくなっていると感じられた。

しかし、Tさんの個人論文には次のような記述があり、最初はやはり抵抗もあったようである。

「最初、このテーマを大勢の人前で発表することは、とても恥ずかしかった。夏休みが終わり、11月6日のフィールドワークが近づくにつれて、恥ずかしさがだんだんなくなってきた。フィールドワークが終わり、聞いてきた話をまとめている時にはまったくそれはなくなっていた。反対にみんなにも知ってほしいという気持ちが出てきた。」

司会者のMさんは、研究集録に次のようにまとめている。

「人工授精・体外受精について簡単に賛成・反対と言えるものではない重大な問題であると改めて痛感しました。そして、この問題は、狭い日本にとどまらず、全世界共通して言えることでしょう。みなさん今現在、他人事だと考えていませんか？私たちにできることは、少しでも多くのことを知り、興味をもつことです。そうすれば、自分の考えが明確になるはずです。」

#### (6) 個人論文作成

個人論文の作成には8時間予定したが、学校での時間内では、とても完成はできず、冬休み中に半分程度まで完成するという課題を出した。

冬休み明けには、完成させて提出する生徒もあればまったく手付かずで1枚も書いてない生徒もいた。

400字の原稿用紙15枚以上を目安としたが、中には、150ページにおよぶ論文もあった。レポート用紙に書いてくる生徒やマンガで表現する生徒もいた。絵や写真も多く利用してあった。中には、インタビューした録音テープが添えてある論文もあった。各自で表紙もつけたため、立体的な表紙や上手に切りぬきがしてあったり工夫がみられた。

#### {Kさんの例}

夏休みにガンセンターでの看護婦体験をした前述のKさんは、資料も含めて38ページの個人論文を作成した。第一章は、「生物学的に癌を知る」、第二章

は「癌を人の立場から考える」となっていて、初めの動機である“日本人の4人に1人の死因となる癌とはいったい何か”という内容から人との関わりに興味が移行していった様子が伺える。

「私はこの研究を通して、ガンという病気もわかるようになりましたが、それ以上に人と人とのつながり、人はひとりでは生きていけないということを改めて感じ、周囲の人たちの大切さやありがたさをかみしめました。」と本人も感想にまとめている。

フィールドワークで訪れた、愛知国際病院では、とても丁寧に応対していただいた。「サポートする側も一生懸命サポートする中で大変なことやつらいことはたくさんでてくる。そんなスタッフのケアも大切なんだそうです。婦長さんは、スタッフのためにいると言ってみました。」「アメリカでは、ガン告知を患者本人にしかしません。家族には話をしないそうなのです。なぜかというと、家族に話せば遺産を目当てにやって来るからです。それは、ガン告知以上のショックを与えられます。だから本人にしか告知しないのです。」とまとめているように、ここで聞いた内容を多く書き留めている。

#### 〔M. M君の例〕

M. M君は、「自動車メーカーの環境対策」というテーマで、自分が好きな“車”から環境を考えた。「自分の好きな“車”に関してのことだったので、気軽に調べられると思っていたが、関連書物も多く、基礎知識を身につけるだけでもたいへんだった。(好きなことだから、抵抗ないけど・・・)」と書いている通り、直噴エンジン、ハイブリットカー、燃料電池電気自動車など、多くの専門用語を十分理解したうえで、論文をわかりやすくまとめている。

「大学生主催の地球温暖化を考えるパネルディスカッションを見に行った時、『車が無くなることが一番だ』という、トヨタ自動車の人の発言を聞いた時はさすがにショックだった。正直言ってメーカーの人からそんな言葉が出てくるとは思っていなかった。これは本格的に車の必要の無い未来を考えなければならぬと思った。」「今思うとこのテーマを選んだのは、メーカーに聞きに行けば、車の未来は大丈夫と言ってくれるのではないかと期待していたのかも知れません。」「車好きの自分にとってはちょっとつらかった」と書いている。

他にも5人の生徒が地球温暖化などの大気に関する環境について調べたがテーマが大きいだけに、メカニズムやデータは調べたものの、自分の生活との関連まで引き寄せることができなかった。この点、

M君の場合は、興味・関心のあることから出発しているだけに、足場がしっかりしており、自分に引き寄せて考えることができて独自のアプローチができた。これはまた、基礎知識を身につける努力や決められたフィールドワーク以外にも出かけて行く行動力の原動力になったと考えられる。

#### 〔個人論文テーマ例〕

「ひとのしあわせについて」「ストレス」「スポーツとケガ」「人の感情について」「睡眠障害」「少年犯罪」「薬と毒について」「ネコアレルギー」「イルカが危ない！」「盲導犬について」「日本の色文化」「音楽について」「教科書検定について」「性虐待・幼児虐待について」「ダイオキシン」「土のある意味」など

#### (7) 研究集録作成

個人論文では、各自が自由な表現方法で好きな分量を書くことができる反面、学年全体の取り組みがつかめない面がある。このため、全員が個人研究の内容を3ページ以内にまとめるようにした。昨年度までは、研究集録は個人研究のまとめだけであったので、今年度は、1年間の取り組みが分かるように、林間学校での活動などについてもまとめた。

個人論文が最後まで作成できなかつた3人の生徒もこの原稿は提出することができた。そのうちの1人は、「この学校に入って、最初に目についた授業がこの総合人間科だった。その時は、たいして興味もなく、そのままほとんど何もやらなかった。でも研究集録を書いてみると“けっこう楽しいな”と思った。自分の思っていることを書くというのは意外と楽しかった。こんなことなら最初から総合人間科に積極的に取り組んでもよかったですなあと思った。フィールドワークすら行かなかつた自分としては少し後悔している。」

このT君にとっては、一年の最後でのこの研究集録作成が総合人間科をとらえ直す良い機会となつた。

一方で個人論文の内容が多い生徒は、締切を過ぎても3ページに納まらずに苦労していた。T. Mさんは、「私が一番悔しかったことは、研究集録を3枚では書ききれそうもなかつたので、いろんなところで短かくしようとして、結局まとまりがないものになってしまったこと」と書いている。

毎年、紙を大量使用して経費もかさむので、昨年度や一昨年度よりもページ数を減らしたために余計苦しかったようであるが、それでも350ページとなり、学年の人数が少ないこともあり1冊3000円以上かかってしまった。

1年間の研究のまとめを必ずしも集録にする必要はないのであるが、やはり、口頭の発表だけでは、後に残らず、一部の人しか聞けない。また、いい加減に済ます生徒がある程度出ることを考えるとせめて今回のように最低2ページ程度書くことは良い機会となる。また、友達の取り組みの様子もわかる。さらに、「友達が中学の頃に書いた論文や、先輩の論文を見てすごいと思った。」と書いている生徒もいるように、次年度の同学年のとてもよい参考になり、刺激にもなる。

フィールドワーク先のみでなく、連絡方法や場所を書き、参考文献をしっかり書くよう指導するとさらに利用価値が増すと思われる。

#### （8）今後の課題

- ①・「生命と環境」という大きな課題に自分なりのアプローチで迫ることができたか。
- ・フィールドワーク、資料集めなどの追求方法を身につけることができたか。

“好きな車”から環境に迫った前述のM. M君や、ネコが好きなのにネコアレルギーで悔しい思いをしているから原因を調べたY. Mさん、夜なかなか寝つけずに困っていたので「睡眠障害」を調べたIさんなど、日常生活の中すでに問題意識のあった生徒は早くから追求活動が始まった。

E. Kさんは、新幹線の運転手になりたいほど鉄道好きで、「鉄道から日本を考える」というアプローチで現在の鉄道における福祉の現状へと広がっていった。全体のフィールドワークの他にも車椅子利用者の方が集まって行った、障害者でも使いやすい鉄道を実現するための“交通大行動”という活動に参加し、個人論文も150ページを越えた。

これらの生徒は、自分で追求方法を搜すことができ、困った時には教員に自分から相談に来る。途中で、専門用語が難しいとか、思う資料がないといった困難があっても自分の知りたいことを知っていく喜びがこれを乗り越えさせることができた。

また、スポーツが好きとか釣りが好きといった「生命と環境」につながりやすいことがらに興味がある生徒は、それほど困らずに取り組むことができた。

しかし、何事にも特に調べてみたいほど興味・関心がなく、「僕はこの教科が嫌いだ。この教科をやる意味はまだわかっていない」（Y君）というように、教科自体に消極的で、“やる気が起こらない”と書いた生徒もいた。

また、多少知りたいことがあっても今までに調べ

た経験のない生徒（附属中学以外の出身）がグループ内に2～3人はいて、どんどん進んでいく生徒と大きな差が生じた。その上、進んでいなくともアドバイスを求めにも来ない。このため、何度か請求して、やっと夏休み前までに個人テーマを書いたプリントを提出する状況であった。

このような、進まない生徒の他にも、他の生徒の邪魔をしたり、指導教員の指示に従わずに関係ない雑誌を見ていて、注意しても反抗的な態度を示す者もいた。このような生徒は、内容的に“その他”で分類された第4グループに多かった。

これは、グループ分けの時から予想された事態であるので、第4グループは17人という最小の人数にしたのであるが、多様なテーマに取り組む17人の生徒を1人の教員では十分指導できないのが現状である。日常の教科指導においても同じであるが、十分な指導のためには、十分な教員の人数が必要であると痛切に感じる。

また、この第4グループには、競馬が好きで「競争馬と血統」というテーマにしたH. S君のように、馬主さんに話を聞きに行くなどの活動はできたが、血統調べで留まっている生徒もいる“今後の課題”の章でわずかに、「引退した馬の多くが肉にされている。引退後の馬の世話をもっとすべきだ」と書いてあり、ここから広げ、深めていけば、「生命と環境」に迫ることもできると予想されるが、残念ながらこの1年では追求することができなかつた。最後に書いている「来年こそは、もっとまともなテーマを選びたいと思います。」という前向きな姿勢に期待したい。

一方で、かつて“やる気”がなかった生徒が変化していった例もある。

人前で話すことが苦手で、中学2年生での個人研究の発表会に近い総合人間科の時間になると調子が悪くなってしまって保健室に行き、当日も休んでしまったT. M君は、今年は保健室に行くことなく総合人間科に取り組むことができた。

紀要第41集53ページに取り上げたB君は、中学2年の時に「総合人間科をやるなら、土曜日につぶれた授業をやった方がいい。数学、英語の方が勉強しやすくて好き」と言い、個人論文は調べたことを必要最小限、同じテーマで調べた友人のを写して出すという消極的な姿勢であった。

しかし、今回は、「感情の表面は分かったつもりな

ので、もっともっとその奥を知りたいと思う。そのためには毎年コツコツ調べていくしかない。」と書いている。末尾には、フィールドワークで話を聞いた方への謝辞があり、「本や資料がない貴重なお話を聞けてよかったです。この体験は一生忘れない」と書いてある。学校生活全般において、興味・関心を示さず、表情があまり豊ではなくかったB君であるが、総合人間科も3年目となり、1年間の活動が予測でき、数学や英語の勉強のように、追求活動に抵抗がなくなったためか、「人の感情」という難しいテーマに以前と比べて積極的に取り組むことができた。

ここで、追求活動を進めるさいに、問題になる生徒を2つのタイプに分けてまとめてみたい。1つは、他の教科での学力が低く、劣等感もあり、自分から課題に取り組むことができない生徒で生活様式も荒れている。このタイプの生徒はたいてい、他の生徒を直接邪魔するかグループ全体の雰囲気を悪くする。この生徒たちこそ、最も接点をもちたい生徒である。

これらの生徒も、ゆったりと興味・関心を聞き出されると、他の生徒では考えることのできない視点をもっていたりする。この点を認めながら、少しずつ進めていくと、認めてもらいたい気持ちがある者もいるので、他教科では消極的でも、総合人間科で力を發揮する。「その考え方おもしろい！」と言うだけで、実際に嬉しそうな表情をするのである。学校の中で自分の居場所を捜しつつも、見つけられないでいる生徒にとっては、大切な場所となる。一年の間にある一定のレベルに達する必要はなく、その子なりの進歩があればよいのであるから、誉めるチャンスは普段教えている化学よりはるかに多い。いつも怒ってばかりの生徒を誉める機会があると、教員にとっても救いになる。

例えば、第3グループのR. M君とA. Y君も邪魔をしたときもあるが、R. M君は人前で話すことは得意なので、パネリストを快く引き受けた。その応援団となったA. Y君は資料を作った。2人でコピーをもって嬉しそうに走ってきたので、何かあるなと思ったら、B紙に書いた精子の中には、担任の顔写真が貼ってあった。もちろん、発表当日、フロアーの生徒に受けたので、喜んでいた。直接、自分の追求活動につながらなくとも、他の生徒や教員と共に思い出をもつことができた。担任団を離れても、彼らとの接点として残った。総合人間科の様々な活動の中のどこかで活躍することができた生徒は、現時点での問題を追求する力は弱くとも、まだ、今後の可能性がある。

この1つ目の中で、学校生活の中にまったく価値を見いだせず、“高校ぐらいでとかんと”というだけで学校に来ていたN君のようなタイプは、非常に接点がもちにくい。他の教科の学力が低く、授業中無気力でも、自分なりのこだわりをもっている場合は、基礎知識の壁にぶつかりながらも、進んでいくことができる。しかし、N君の場合には、学校生活全般においてまったく興味・関心がなく、すべての座学、体育などの実技、部活動、クラス活動、総合人間科のいずれでも居場所がなかった。残念ながら、1年終了時に退学した。保護者の話では、N君は小学校時代、成績もよく、習いごとにも積極的で“手のかからない子”であったという。“手のかからない子”こそ、問題であるのかも知れない。

2つ目は、学力はあるが自分で追求方法を考えることができない生徒である。たいてい、このタイプの生徒は、静かで他の人の邪魔はしない。つまり、他の教科では、“手のかからない”生徒である、教員の言葉にも素直に受け答えするので、見落としがちであるが、大きな問題をかかえている場合もある。

化学の実験が理論通りにならないと、どこで違ってきたかを考えもしないで、データを理論値に改ざんする。テストに出るかどうかにこだわったり、法則発見の過程よりも結果だけを暗記しようとしたりする。暗記力と知識で現在を乗り越えてはいるが、将来、社会に出た時、あるいは、子育てなどの、理論通りに進まない事態に直面した折にN君よりもさらに深刻な状況を招くおそれもある。

②学校を人とのつながりの場としてネットワークづくりの拠点とすることができたか。

一人一人のテーマはたとえ小さくとも、友達と互いにアドバイスしあいながら追求する中で、相互の関係を認識し、様々な角度から、大きな視野にたって「生命と環境」に迫ることを期待している。

しかし、自分のテーマにしか興味を示さず、他の人の発表をしっかり聞かない年もあり、特に第4グループでは、学校内でのネットワークづくりすら困難な状態であった。

それでも、全体的に見れば、個人テーマの追求活動は、フィールドワークで話を聞く相手の方と直接自分が交渉するために、林間学校のクラス別フィールドワークと違って、自分の力で教室から出るために、自分と訪問先とのつながりが深くなる。そういう意味で、多くの生徒が学校と訪問先との間にネットワークをつくることができた。

また、保護者の方々やスクールボランティアとし

て登録していただいた名古屋大学内の先生方にも、訪問を受け入れていただいてネットワークを広げることができた。

次に紹介するのは、自分のテーマ追求に留まらず視野を広げていくことができた生徒の小論文の抜粋である。

「総合人間科をやって思ったことは、みんなが調べていることは、全部つながりがあるということです。例えば私の調べている“夢”は黄柳野高校に關係あって、それは、心身症と關係あって、心身症は少年非行と關係あって・・・っていうふうにぐるぐるまわっていくもんだと思います。私もそのまるの中に1つになれたことを誇りに思います。」（R. Kさん）

「他の友達がやっている研究も自分の研究とつながりがある気がしたものの、興味深く、おもしろそうだと思ったものをよく見せてもらったりした。友達と自分の研究を見せ合うことは、お互いを高め合うのにとてもよい方法だと実感した。がんばればがんばるだけ、よりたくさんの人を見てもらいたいし、自分では気づかない点を友達は気づいてくれることが非常に多いからである。そうやって作った自分の研究は、自分にとってすごい誇りになるし、一生の財産になると思った。」（Fさん）

### ③自分の意見をもち、発表する機会があったか。

パネルディスカッションを見学した教育学部3年生は次のような感想を書いている。

「それぞれの生徒が、自分なりの問題意識をもって主体的にこの“場”に参加している雰囲気が感じられた。こうした活発なディスカッションが行われていることに、私はまずもって驚き、感心させられた。自分が高校生の頃を思い出すと、このように自分の意見を表現し、他者と議論することなどできなかっただと思う。そして、大学に入ってから、問題探究能力や自己表現、コミュニケーション能力の必要性を感じることが多く、このような能力の開発は非常に重要であると思われる。」

確かに、発表する生徒も質問する生徒も堂々として、はっきりと自分の意見を述べた。しかし、一方で、ディベート、パネルディスカッションのいずれでも一度も発言していない生徒もいる。どちらの形式も発表が得意な生徒が中心になるからである。

学年の最後に、個人論文を見ながら、10人程度の

小グループで話し合えば、発表が苦手な生徒も発言できる計画していたが、時間が足りなかった。

この感想にあるように、自分の意見をもち、表現していくことは大切である。これらの生徒も夏休みの活動報告やフィールドワークの報告は行っているので、少しずつ慣れて発言できるようになることを願っている。

次の2人の生徒は、“自分なりの考えをもつ”ことについて以下のように書いています。

「自分で調べたり、フィールドワークでお話を聞くと、報道の内容と違う点もあることに気づいた。特に、この問題は、はっきりと結論が出されていないので、本でも、色々なことが書かれている。だから、報道されたことや人の話をうのみにするのではなくて自分で考えて、自分なりの結論を出してみるのも大切だということに気づいた。」（Y u. Kさん）

「『当然』というテーマで研究をして、一番思ったことは予想していたが、本当に様々な“当然”が存在し、それを深く考えもせずに過ごしている。もちろん自分の中にもたくさんの当然を研究中に見つけた。

“学校へ行く”ということ1つにしても人それぞれいろんな“当然”があつたし、みんなそれなりに理由があった。私はどの答も選べなかった。そこで考えて、そのすべてを私の“当然”にしようと思った。できることなら、私は“当然”的な人間になりたい。どんな行動を見ても、動じず、認めることのできる広い視野をもった人間になりたい。そう強く思った研究だった。」（Fさん）

この生徒は紀要第41集52ページのAさん、42集の53ページのFさんと同一人物である。中学2年、3年に続き今年度も、独自のアプローチで粘り強く追求し、自分なりの表現で1年を振り返ることができた。

### ④他教科との関係

もちろん、上記のFさんのような生徒と違って総合人間科に対して、不満の声もある。

「総合人間科には脅迫観念がつきまと。論文には締切、～までに出せ、出してみたら返される。そんなことならあたりさわりのないことを書こう。私はその手の人間です。でもめんどくさいからだけじゃない。中途半端が嫌いなんです。」（Aさん）

「いつも締切に追われて仕方なくやる、という感じだった。私は自分で興味のあることを調べるというのは嫌ではない。自分の本当に知りたいことは1年やそこらで答えが出るものではない。だから1年という期限がついてると本当に調べたいことが除かれてしまうのだと思う。」(Tさん)

どちらも、調べることは好きなのだが、発表や原稿の締切などに追われることへの不満である。確かに、今年度は、総合人間科も3年目で、生徒も慣れて、いろいろなことができるということで、内容を増やし過ぎて、じっくり取り組むタイプの生徒にとってはペースが早かったようである。

しかし、発表や締切がなどの課題がなければ、なかなか追求活動は進まない。次の生徒のように、1つ1つの課題を乗り越える中で、追求活動が進んでいく生徒もいる。

「総合人間科をやらされなければ、ここまでできなかっただと思う。自ら、テーマを決めて、連絡して、フィールドワークに出かけるなんてことは、私にはきっとできなかっただろう。そこまでして学びたいものなんてなかったから。やっぱり意志の弱い私のような人間にとってやらされることは多少必要なことだと思う。やらされることで私は、フィールドワークをきっかけにボランティア活動をはじめることができた。」(Y o. Kさん)

以下の生徒のように、“時間”という点で他の教科にマイナスの影響があると考えた生徒もいた。

「本当にこの授業が必要なのだろうか。他の学校に対する見栄ではないだろうかとも考えた。総合人間科によってただでさえ少ない勉強時間がもっと減った。」(N. T君)

「論文を書くのに、かなり苦労した。そのために、学校や塾の勉強に対して手がまわらないという問題も起きた。」(Sくん)

2人とも、授業全般に熱心な生徒である。S君は早くから、大学入試問題を聞きにきた。すでに、大学入試への計画を立てている中へ、総合人間科が割り込んだように感じている。

今までのような大学入試では、社会に出たときに、役立つ人材が育ちにくいと言われてから久しい。総合人間科は確かに、現状の大学入試で試される学力と直結する部分は少ないかも知れない。しかし、総合人間科を3年間を経験して卒業した高校3年生の中には、総合人間科で育てた発表力、作文力を推薦

入試の面接と小論文に生かして合格する生徒も出始めた。

「確かに総合人間科は楽しいけれど、負担がとても大きい。睡眠時間を何時間も削って発表の準備や論文や原稿を書く。こうしなければならない状態までためこんだ自分も悪いかもしれないが、どうしてもそうなってしまうのが現実なのだ。(中略) 論文を書いている時、もう嫌だと思うくせに、他の教科をやっていると、『あ～あ、総合人間科はあんなにおもしろいのに、なんでこんな勉強しなきゃいけないんだろう。つまんないなあ』と思うのだ。(中略) 国語、数学、英語などを“何のために勉強しているのか”と一度気づいてしまった以上どうすることもできない。このことに気づいたのは良いことでもあるし、悪いことでもあると思う。目指す職業につこうと思えば、学力が必要とされる。これを考えると、このことに気づいてしまったことをあまり良いことではない気がする。“勉強をしている意味がわからない”とつくづく思った。」(E. Kさん)

生活体験が減り、知りたい、学びたいという欲求が生まれる前に、知識を詰め込まれて、学ぶ喜びを失い、知的向上心が低下しつつある生徒が少なくなっている。それらの、生徒たちにもこの総合人間科での喜びをきっかけに、他の教科へも積極的なはたらきかけができるようになってくれることを願っている訳だが、E. Kさんは逆の現象を書いている。

しかし、総合人間科の取り組みを深めるには、いろいろな教科に知識が必要となる。調べたいという知的向上心の強い生徒だけに、この状態を乗り越えていけるのではないかと期待している。

また、見方を変えると、他教科においても、せめて20人学級であれば、きめ細かな指導や追求活動を取り入れることができ、E. Kさんの知的欲求にも応えられるのではないかと思われる。人数が少なければ、同じ内容を短時間で伝えることができる。

かといって、すべての教科が、総合人間科のようになると、逆に困る生徒もいる。多様な生徒が、学校生活全般のどこかで、居場所をもつことができるよう願っている。

総合人間科と既成の教科との関係、あるいは、学校の活動全般の中での位置を考えることは、今後の大きな課題である。

#### ⑤評価について

林間学校での研究企画やフィールドワーク報告、

パネルディスカッションなど、発表や討論会においてはすべて全員が記録を書き、発表者に対して評価とコメントやアドバイスを書いた。これらの相互評価はその都度、発表者に見せて参考にしてもらった。

また、最後の時間には、テーマへの取り組み方、テーマへの追求、意見交換、研究発表・研究集録、個人論文、自分自身の変化について、全体を振り返ってという項目に分けて自己評価を行った。

しかし、いずれの評価も生徒の手元には残らず、教員が総合的に判断してつけた評定のみが残ってしまった。最終的に生徒に渡るような評価用紙があつて、複数の教員と同級生、訪問先相手のコメントやアドバイスが残ると励みになるのではないかと思うが時間的には難しい。

⑥日常生活に変化はあったか。

「テレビを見ていて、これは関係あるかも、と思った番組には集中してメモを取りながら見たり、普通の本を読むときでも、今まで目につけなかったところに目をつけたりと、生活の中にまで、総合人間科が入ってきていた気がする」（Kさん）

というように、自分の追求テーマの内容のみでなく、自分の判断力について考えを広げたり、日常生活にも変化が現われている生徒もいた。

私自身も、ここに書ききれないほど、さまざまはことを考えるきっかけとなった。生徒の追求力や感性に刺激を受け、改めて、自分の教科や学校生活全般を見なおすきっかけとなった。何度もフィールドワークに出かけて新しいことを知り、以前より、本を買い、新聞をたくさん切りぬくようになった。

短期も含めれば、校外でボランティア活動をしている生徒も各クラスに数名はいるが、彼らが、教室に落ちているゴミを進んで拾う訳ではない。今のところ、まだ、“認められる（誉められる）”ボランティアはしても、本来の無償のボランティアはしないのである。むしろ、学校生活を基盤にしている生徒の方が地道に教室の美化に協力してくれる。

小さい頃から、多くの情報を得て、習いごとなど、学校外での活動時間が増える生徒たちの中には、もちろん、視野の広い生徒もいるが、逆に学校生活の中の足場を無くし、理解しても、実生活に結びついていかない場合もある。

しかし、本当に「生命・環境」を考えていくには、パネルディスカッションのテーマにもなったように、“ライフスタイル”を変えていかねばならない。便利

さを手放す覚悟がいる。とても難しいことであるが、次の生徒の決意に期待している。

「1つのことについてじっくり調べ、考え、まとめるることは大切なことであり、勉強になりました。でも結果論だけ立派で実行していないのでは意味がありません。結局自分は何も変わってないのかも知れません。建前だけ立派に言えるようになったのかも知れません。私自身、こんなのは嫌です。だからこれからは、建前じゃなく、実行力がある人間にになりたい。」（Yさん）